

日本統治下の台湾における植民地人類学， 「理蕃」政策，先住民族の人種化過程

アルノ・ナンタ*

台湾において、日本統治期の50年間を通して、「原住民」とその社会に関する膨大なフィールド調査が実施された。そのうち、台湾における人類学研究は日本の他の版図に比して、重要な地位を占めた。台湾における植民地人類学はもっぱら、漢族系台湾人ではなく、オーストロネシア語系の台湾先住民族を研究し「原住民」こそが真の台湾人であると考えた。

拙稿の主要課題は、植民地人類学者が台湾の人口全体、殊に台湾先住民族をいかに捉え、台湾総督府がこの一連の表象をいかに再生産し、さらに、こうした表象がポストコロニアルの時代になっていかに内面化され存続しているか、を明らかにすることにある。台湾のオーストロネシア語系先住民族に関する植民地学知は、アカデミックな研究、そして専門家から構成された委員会（つまり行政による調査）による報告書が交差し、植民地政策が人類学研究の成果に基づき、人類学研究が植民地当局の言説をさらに学問に導入するという、まさしく一種の弁証法だった。台湾先住民族の捉え方や研究方法に幾つかの段階があったが、植民地研究と植民地当局の各々の言説は、（固定概念に基づく）「風土」に根づいた人種的文化的コンプレックスとして台湾の原住「種族」の民族的地理的分類を行うという課題に対して、19世紀末から20世紀半ばにかけて、絶え間なく熱狂的であった。この学問的・行政的な言説こそが、先住民族アイデンティティを創造し、そしてこのアイデンティティは植民地期以降も現在の民主的台湾においても存続している。

一）先住民族の分類と植民地期におけるアイデンティティの創造，1896-1902年

台湾先住民族に対する研究は1896年から、帝国大学から派遣された人類学者・考古学者の鳥居龍蔵と、歴史学者・民族誌家の伊能嘉矩が担当することになる。二人とも東京人類学会会長・坪井正五郎によって帝国大学人類学教室で学び、英国の民族学や仏独の形質人類学が打ち

* Arnaud Nanta Centre national de la recherche scientifique, Lyon, France

出した方法論を身につけながら総合的な学風に属する研究者だった。鳥居が1896年から1900年の間に計4回台湾に渡り詳細な現地調査を行なったのに対し、伊能は1906年まで台湾総督府に所属しており常時現場にいた。「エスニック」服や裸足といった設定で台湾先住民族を撮影した鳥居龍蔵や台湾総督府囑託の人類学者、森丑之助の写真は、未開で懶惰な先住民族像の定着に大いに貢献した。伊能に関しては、栗野伝之丞と共に1897年に総督府の命により、台湾先住民族の民族的人種的な実証的な分類を作成するのであった。

台湾先住民族の基本的な分類は、数年間という短い期間の内に発表された論文が交差することによって形成された。伊能はまず、1898年に「台湾に於ける土蕃の分布及び現在通有する開化発生の度」そして「台湾に於ける各蕃族の分布」を投稿して分類を打ち出し、そして鳥居は1897年の調査成果に次いで1899年に『人類学写真集 台湾紅頭嶼之部』を出版した。続いて伊能と栗野は1900年に『台湾蕃人情』という報告書を発表した。この上、鳥居は1902年に『紅頭嶼土俗調査報告』を、1910年と1912年にフランス語で『台湾の原住民』という報告書を刊行した。

台湾における植民地人類学は、初期から分類作業に取り憑かれていた。鳥居は晩年、「人類学は台湾山上のアボリジニス生蕃の調査が目的であった」と回想したが、要するに大清時代にはより文明化したと判断された平原在住の「熟蕃」と未開人と判断された山岳地帯在住の「生蕃」が区別されていた、中国文化への感化の度によって前者と後者が差異化されていた。こうした範疇とその前提が「中華思想」の現われであるとして植民地期の日本人研究者によって否定された。

植民地人類学者が従来の民族分類を批判したことから、日本による台湾統治の合理性を謳う新しい分類が必要となり、学者たちは自らの作業を自己正当化した。同時に、先住民族のアイデンティティが創造されるプロセスが働いた。人類学者の「意図」や先住民族に「自己定義させた」かについては無限に議論が可能であろう。だが、最終的には、植民地人類学研究がもたらした効果が問題である。台湾先住民族の分類作業と民族境界の確定は、トップボトムで成されたのであり、その結果、先住民族には「種族」アイデンティティが創造され、彼らは一種の固有な本質をもって捉えられるようになったのである。伊能と鳥居にとって、漢族系台湾人は「移植支那人」であり、台湾人ではなかったのだが、この表現は人類学者たちのみならず、例えば台湾総督府官僚の持地六三郎の著作にも見いだせる。この「エスニシティー」観は、存在論上、土着したアイデンティティのみが実存するのだという意味合いを有している。言い換えれば、台湾総督府にとって漢族系住民も先住民族も共に事実上の「台湾人」だったのに対し、結局人種論にとらわれた人類学にとっては真の台湾人は地に根づいた先住民族たちのみだったのである。こうして台湾先住民族は一種の固有な本質から捉え得る存在として作り出され、いわば本質化されていった。

ところで、研究者や植民地当局は台湾先住民族を「蕃族」と呼んでいた。この語は主に山岳地帯の住民を指しており、平原在住の先住民族は「平埔族」という名称で区別されていたが、人類学者にとって後者は台湾先住民族たる本質を失ったとして研究の対象に相応しくないという結論だった。こうして純粹だとみなされた山岳地帯在住の先住民族のみが、真の台湾本質を有していることになった。

台湾の山岳地帯に棲息する先住民族は伊能・栗野報告書において、7つのカテゴリーで分類・構築され、続いて鳥居が著した論文によって9つのカテゴリーに構築された。平原在住の平埔（パイボ）族が加わる。

そして最後に、台湾での人類学研究は最初から台湾先住民族と台湾先史時代の住民を重複して捉えた。当時の日本アカデミズムにおいて、アメリカ合衆国と同様に、先史考古学は「先住民」のみを検討しており人類学の補助学問だった。台湾先住民族と先史時代の住民が重複されるというのは、被支配民族が文化上・人種上、停滞しているという、植民地における（台湾では「山岳」という）「開拓地域」型植民地に独特な存在論上の前提があったからである。北海道と千島列島のアイヌ先住民族あるいは北米のインディアン先住民族と同様に、台湾先住民族も先史時代の住民の末裔か「生きた化石」として捉えられた。しかも、こうした植民地主義的な言説は、人種間戦争としての植民地史観と一体になっていた。1945年以前の人類学=考古学によって、台湾先住民族は「歴史の開闢」期として考えられた植民地時代に、漢族そして日本人という入植者によって台湾の山岳地帯へ駆逐されたという言説の下で、いわば原始人扱いされたのであった。先史時代にまつわる言説も検討する必要があるが、紙幅制限のため省略する。

二）「旧慣」調査と台湾総督府の「理蕃」政策、1900-1918年

台湾総督府は19世紀末から、地籍調査や不動産所有に関する調査、または人口調査や「旧慣」調査を命じた。1900年に台湾慣習研究会が設立され、そして1901年に臨時台湾旧慣調査会が設立された。台湾慣習研究会は京都帝国大学の法学者の岡松参太郎と織田萬を中心に、台湾人の「旧慣」の研究に取り組んだ。そして臨時台湾旧慣調査会は、法制を担当する第一部と農工商経済を担当する第二部から構成されていた。それでは、いわゆる「理蕃」政策に移ろう。

漢族系台湾人ゲリラが鎮圧されるにつれ、総督府は1900年前後から「蕃族問題」に注目するようになる。この時期から、植民地台湾で糖業と並んで中心的な産業だった樟脳生産を振興する目的から、山岳地帯を完全制覇する必要性が強まった。20世紀に入ると「理蕃」政策はより安定するようになる。同時に1898年に台北南部の大嵙崁の総督府が言うタイヤル族が蜂起を起こし、1902年にサイサイアット族とタイヤル族が台北南部の南庄支庁を混合攻撃した後、植民地当局は「蕃変」（蕃族による事変）の徹底的な「平定」と「討伐」を決定したのであ

る。南庄支庁の場合は、鎮圧は5週間も続いた。

1902年の南庄事件の折、植民地官僚の持地六三郎は、「蕃政問題ニ関スル意見」という報告書をまとめた。「不逞」（つまり不従順）民に対しては、容赦ない討伐を呼びかけていた持地は、それでもこの報告書において人種ではなくて文明を重んじており、同化政策の重要性を強調した。けっきょく台湾総督府は1903年に「理蕃大綱」という政策方針を定めた。この公文書は、伊能と鳥居の成果に基づいて各々の部族地域を確定するものであり、つまり、植民地人類学が創出した先住民族分類は地域化された行政的な現実へと化したのである。この上、「蕃地」は1901年から1904年にかけて警察の管轄となり、その後、1903年に設置された「蕃地事務委員会」の管轄下に置かれた。「蕃地事務委員会」は1910年まで存続し、次いで1909年に設置された「蕃務本署」に取って代わった。そして1915年から「蕃務」は再び警察の管轄となった。様々な模索があったが、「理蕃」政策の最終目的は先住民族を、漢族系台湾人と日本人居留民から隔離し、特別行政区つまりいわば部族地域に封じ込めることだった。その周囲に「隘勇線」という境界線が敷かれ、これは1909年の時点では470kmの壁が立ちその一部は電流有刺鉄線だった。「理蕃」は佐久間左馬太総督の任期に加速した。佐久間は、1910年から1914年にかけて五年理蕃企画つまり山岳地帯の平定戦争を企画・実施した。持地は1912年に「民族の生存競争に於て劣等人種の優等人種に駆逐せらるるは争ふべからざる真理にして、台湾今日の拓殖の成果は此の真理を証明せるものなり」と考えていた。一方同化政策、もう一方（先住民族が消滅する運命にあるという）社会ダーウィニズムの間に、1910年代の官僚と専門家たち、両大戦間の人類学者たちが躊躇していた。

山岳地帯の鎮圧作戦と岡松参太郎の指導する調査は平行して行なわれた。伊能は両方の研究機関に関わっており、1903年に設立された蕃地事務委員会にも関わっていた。初期の時期には特に臨時台湾旧慣調査会が主要な役割を果たした。その第一部は1909年から台湾先住民族の調査を開始し、同時に組織全体が岡松の掌中に収まった。岡松は法制調査のみならず、法人類学という観点から、先住民族調査においても中心的な役割を果たした。この一連の調査は1913年から1921年にかけて『蕃族調査報告書』、1915年から1922年にかけて『蕃族慣習調査報告書』という形でまとめられた。なお1921年に、これら報告書に基づいて、岡松は大著の『台湾蕃族慣習研究』（全8巻）を刊行した。中国語訳（台湾）が出た本書は、台湾における植民地人類学の最重要成果の一つである。

伊能と鳥居が1900年前後に作った民族分類を大まか継承しながら、本書は、台湾先住民族をいっそう一種の本質をもって捉えるものだった。岡松の研究成果は、同時期に北米のインディアン先住民族を研究していたロバート・ローウィなどと同様に、第一次世界大戦時代の人類学の世界趨勢とびたりと合致して、台湾の先住「民族」を確定する為に、特に、親族関係、相続制度、社会ヒエラルキーと統治法に注目していた。例えば、アミ族は母系性、パイワン族

は自律性の低い酋長制、タイヤル族は土地の共有制を有し自律性が高い、というように、各々の先住民族は不動なる枠組みに組み込まれた。なお伊能や鳥居と異なり、岡松にとって、先住民族の自己定義ではなく、むしろ各々制度の確認が最優先された。岡松からみれば、民族名は台湾先住民族から由来するものではなく、研究者が決めるものだった。これは「番人自身ニハ民族及種族ノ觀念アルニアラズ、自ラ番族ノ一種族タリ又ハ或種族ノ一人ナルコトヲ意識セズ〔中略〕又固有ノ種族名アルコト稀ナリ、即生番ヲ種族ニ分ツハ〔制度を研究することによって〕客観的見地ヨリ系統ヲ立テ分類スルモノニ外ナラズ」のだという。つまり、台湾先住民族は「民族」としては、植民地政権によってのみ存在するものである。結局、岡松など台湾総督府の為に勤めた専門家たちは、先住民族社会の各々制度の間に確認した差異を強調ばかりして、従来の人種学的解釈による結論を再正当化した。

三）台北帝国大学と人類学研究の制度化

1928年に設立された台北帝国大学には当初から、土俗人種学という民族学関連講座があり、この教室はもっぱら台湾先住民族のみを研究した。講座の担当教授はシカゴ大学で学び1917年にハーバード大学博士、1940年に台北帝大文政学部長となった移川子之藏だった。移川はアメリカ・オーストリア学派の文化人類学が抬頭した両大戦間に独特のプロフィールを持っていた。なお、1936年に設立された医学部にはもっぱら台湾・東南アジアの住民を形質人類学的な観点から研究する解剖学第二講座があり、担当教授は金関丈夫だった。形質人類学はここでは省略する。

土俗人種学教室と解剖学第二教室が推し進めた研究に関しては、移川と金関たちは、台湾総督府の為に専門家として活躍するのではなくて、世界各国の人類学の成果と肩を並べられる業績を生産したい姿勢があったという意味で、真に学術的な学問であった。しかしながら、彼らの研究成果が、全くイデオロギー的に「中立」であったという意味にはならない。むしろ逆に、台北帝大の人類学者は、半世紀も前に作られた台湾先住民族の民族的アイデンティティを、再編し、強化した。

土俗人種学教室が著した最重要な研究成果は、『台湾高砂族系統所属の研究』である。1936年に帝国学士院賞を受賞したこの大著は、1945年以降も再版され、中国語訳（台湾）も出ている。上記の『台湾番族慣習研究』と並んで、日本の植民地人類学の最重要な研究成果の一つである。1930年代に入ると山岳地帯在住の先住民族は「蕃族」に代わって、学者と行政機関に「高砂族」という総称で呼ばれるようになる。この研究書は平埔族つまり「中国化」したとされる平原在住の先住民族が検討対象から外された。

同じ時期に、台湾総督府は1925年から先住民族の強制移動を進めていた。この政策こそ、

1930 年 10 月に起こった大峰起の霧社事件と、その厳重な鎮圧の背景を成している。事件の処理後、「理蕃」政策は 1931 年に「理蕃大綱」の作成をもって再編されたが、この公文書では強制移動、植民地当局と人類学の関係強化が謳われていた。

移川たちは中立的な立場でフィールド調査に取り組んだのではなく、ある民族分類と民族区域を使うという前提をもって先住民族の調査に取り組んだ。第 1 巻の全 9 章という構成で確認できる民族分類と民族間の境界確定は、鳥居による分類を継承するものである。つまり、台湾先住民族を描写し、民族分類を結論する筈のこの調査に先立って、明確に区劃される「台湾原住民」が存在している、という観念が調査の前提になっている。なお、『台湾高砂族系統所属の研究』には形質人類学、文化的描写、経済学、言語学的観点が含まれていない。この研究はもっぱら、各々の民族・部族の伝説の系譜図の作成を目的としており、民族的系統図の作成を目的としていた。台湾先住民族の系譜図・系統図を再現した上で、基本的に区域内は同質的と見なされる各々のエスニック領土とその変遷、そして、各々の民族の相互関係とその変遷を明確にすることが、最終的目的だった。移川たちはこうして、台湾先住民族に対して一種の「種族史（エスニック・ヒストリー）」を提示したのである。つまり植民地人類学は（大陸移民、欧州の入植者、日本統治期など）植民地化以前の台湾を「先史時代」として捉えて、先住民族には歴史がなく先史時代しかないという見解から、お互い異質的であるというオーストロネシア語系民族が次々と台湾に渡来したとし、その度に民族的・文化的に一番優秀である新渡来民族が、以前渡来した劣等民族を山岳地帯へ駆逐するという史観を提示した。

結局、土俗人種学教室による研究は、1900 年前後につくられた民族分類とそのエピステーマを変えようとせず、むしろそれを強化した。

結 語 に

1945 年以降、植民地時代のエピステーマがいかに存続したかという問題が当然浮上する。台湾が国民党の管轄下に置かれると、台湾先住民族の多様性が否定され、彼らは単一民族扱いされた。だが、台湾の民主化に伴って戦後の枠組みが覆されるようになり、2001 年から 2014 年にかけて台湾の先住民族の権利が保証され、憲法上において個別的な「原住民族」としてその存在が認められた。しかしながら、植民地時代の民族分類が存続し、細分化されるのみであった。長期間で見れば 1890 年代から 2010 年代にかけて 120 年間も継続したプロセスとは、台湾の先住民族のアイデンティティが創造されて本質化され、植民地期のエピステーマを温存する現在の台湾社会や現在の日台人類学に至るまでのものである。連綿と続き、単一的な国民観・民族観が人文社会科学によって解体されている今日であるが、それでも少数民族のアイデンティティは従来通りに 19 世紀に形成されたこうした国民国家・植民地主義という近代パラ

日本統治下の台湾における植民地人類学, 「理蕃」政策, 先住民族の人種化過程 (ナンタ)

ダイムの中で考察されるままである。

重要参考文献一覧

- Nanta Arnaud 2010 “Torii Ryūzō: discours et terrains d'un anthropologue et archéologue japonais au début du 20^e siècle”, *BMSAP*, 22: 24-37
- Tsu Timothy S. 1999 “Japanese colonialism and the investigation of Taiwanese ‘old customs’”, in van Bremen Jan, Shimizu Akitoshi (ed.), *Anthropology and colonialism in Asia and Oceania*, London, Routledge, p. 197-218.
- 劉斌雄 1975 年「日本学人之高山族研究」『民族学研究所集刊』中央研究院, 40 号 5-17 頁
- 伊能嘉矩, 栗野傳之丞 1900 年『台湾蕃人事情』台湾総督府
- 移川子之藏, 宮本延人, 馬淵東一 1935 年『台湾高砂族系統所属の研究』台北帝国大学, 上下 2 卷
- 岡松参太郎, 台湾総督府蕃族調査会 1921 年『台湾蕃族慣習研究』全 8 卷
- 金関丈夫 1978 年 [1952 年]「台湾居住民族を中心とした東亞諸民族の人類学」『形質人類学』法政大学出版会 65-87 頁
- 近藤正己 1993 「『理蕃の友』 解題」緑蔭書房, 3-15 頁
- 坂野 徹 2005 年『帝国日本と人類学者』勁草書房
- 台湾総督府 (編) 1916-1937 年『理蕃誌稿』全 4 卷
- 鳥居龍蔵 1975 年『鳥居龍蔵全集』朝日新聞社, 第 5 卷
- ナンタ, アルノ 2018 年「帝国日本と台湾・朝鮮における植民地歴史学」坂野徹・塚原東郷共編『帝国日本の科学思想史』勁草書房, 88-122 頁, xvi-xix 頁

要 旨

台湾において、アフリカやアジアにおける他の植民地帝国と同様、日本統治期 50 年間にわたり、いわゆる「原住民」とその社会に関する膨大な人類学的調査が実施された。帝国日本の他の版図と比較すると、台湾における人類学研究はより大きな地位を占めた。同地での植民地人類学は主に、漢族系台湾人ではなく、オーストロネシア語系の台湾先住民族を調査し、植民地当局の言う「原住民」こそが土着の台湾人であると考えたのである。本稿の主要課題は、台湾先住民族に関する植民地学知を総合的に取り扱いながら、日本の植民地人類学者らが台湾先住民族をいかに捉えたか、台湾総督府がこの一連の表象をいかに再生産したか、さらに、こうした表象が独立後もいかに内面化され、いかに存続しているかを明らかにすることにある。連綿と続く単一的な国民観・民族観は今日の人文社会科学によって解体され、国民というアイデンティティは構築されたものとして把握・批判されているが、少数民族のアイデンティティは従来通り自然視されている。19 世紀に形成された国民国家・植民地主義という近代パラダイムの中で考察され続けていることが、現在の人類学や人類学者による「人類学史」の限界であろう。台湾山岳の先住民族に対する植民地言説と実践を歴史的に検討することは、植民地科学の側面を照らすだけでなく、植民地主義とアイデンティティの形成というより広義なグローバルヒストリーという課題に貢献できよう。

キーワード：植民地主義、台湾、日本、人類学、先住民族

Summary

The fifty years of Japanese colonial rule in Taiwan, between 1895 and 1945, saw massive field surveys of colonial society and “aborigine” populations, similar to other contemporary colonial empires in Africa and Asia. Anthropology occupied a centrality reached in no other Japanese colony. She focused on these many indigenous minorities of Austronesian languages who lived in Taiwan, alongside the Han Chinese communities, to affirm these groups, which were referred to as “aborigines”, as the only true Taiwanese. The central question of this article, which will summarize Japanese colonial intelligence towards indigenous populations, concerns the way in which Japanese colonial anthropologists apprehended the indigenous populations of Taiwan, the reproduction by the colonial power of these representations, and finally their internalization and perpetuation in post-colonial era. At a time when, today, social sciences are deconstructing the idea of nations as continuous and homogeneous communities, the identity of ethnic minorities remains perceived as a natural fact and is still grasped within the 19th century paradigm of national and colonial modernity. The historical study of colonial discourses and practices towards the alpine populations of Taiwan will shed light on a particular aspect of the history of applied science and colonization, while completing the overall history of the forging of identities in colonial situations.

Keywords: colonialism, Taiwan, Japan, anthropology, indigenous people